

幼 兒 の 教 育

昭和三十三年十月

弾 力

椎の實が落ちる。ボンミ音を立て、地を打つて跳ね反へつて。栗の實が割れる。いがを破つて梢に跳ねて。草の實が飛ぶ。莢を裂いて、空を切つて。みんな自分の力、餘る力である。みのるきは、秋の木の實、草の實では、強い弾力の持主であることである。秋の野も山も、この弾力の小粒の持ち主でかちん／＼張り切つてゐる。

幼児が馳けて來てぶつかる。コッソミ音でもしそうだ。そうして自分で跳ね反つて飛んでゆく。幼児達互の間に、言葉が跳ね反へる。手が跳ね反へる。目がぶつかる。肩がぶつかる。争ひじやない。戦ひじやない。勿論惡意の反撥ではない。たゞ弾力なのだ。弾力ミ弾力ミの快よい、怡しい觸れ方なのだ。幼稚園は今、この弾力のかわいらしい持主でびん／＼張り切つてゐる。見てゐてびつくりさせられる程に。こつちまでおのづミ弾力的にさせられる程に。

(倉橋惣三)